【NPJ通信・連載記事：一水四見】村野謙吉

一水四見: 仏教の認識論による縁起 (一切のモノ・コトの関係性) を説明する喩え。人間による水の認識を、天人は瑠璃の宝石でできた大地、地獄の住人は膿みで充満した河、魚は住処として、それぞれの立場で認識する。同一の客観対象が、それぞれの主観の認識能力・利害関係等によって様々に認識される。しかも様々な観察者たちと観察対象自体は、相互に連動し、諸行無常の変化をなしている。

親鸞とジョージ・オーウェル *（1/2）

「この世の本寺本山のいみじき僧とまうすも法師とまうすもうきことなり」
（親鸞「愚禿悲歎述懐」85歳以降作）

極東の日本列島に生きた親鸞 (1173-1263) と、極西のグレートブリテン島に生きたジョージ・オーウェル (1903-1950) の両者にどのような関係や共通要素があるのだろうか、と訝しく思われるかもしれない。

筆者はロンドンに滞在していた1979年、あるきっかけでジョージ・オーウェルの『ビルマの日々(*Burmese Days*)』を読み、それから、何に突き動かされたのか知らないが、彼の全作品（小説・日記等）を読了することになり、それらに関係する重要な文献も参照した。

さらにオーウェルが療養したモロッコのマラケシュをスペインのマダガスカルからドーヴァー海峡を船で渡って訪れ、台湾でオーウェル研究者らと議論を交わし、1984年7月、オーウェルの主著『1984年』にちなんでロンドン大学で開催された「バーナード・クリック教授主催のオーウェル・サマースクール」にも参加した。

なぜ私の心の中で親鸞とオーウェルはまったく違和感もなく現在も生き続けている “思想家” なのか？
彼ら二人に共通していること、それは一体なんだろうか。

＊＊＊

親鸞は、生涯の様々な段階でいくつかの僧名や号を用いているが、親の字はインド仏教における最大の学僧ヴァスバンドゥ（漢訳：天親または世親；400年頃～ 480年頃；現在のパキスタン・ペシャワール出身）を意味し、鸞の字は、ヴァスバンドゥ著『浄土論（漢訳)』の注釈書である『浄土論註』を著した中国の学僧・曇鸞を意味している。

そこで親鸞は、ブッダによって説かれた歴史的世界を超える「彼岸への道」を「念仏の道」として説いたインドと中国の二大学僧の衣鉢をついでいるとの自覚と自負を持っていたのだろう。

では親鸞は、どのような時代に生きていたのか。彼が生きた時代相を以下略述する。

・１１６８年：栄西（臨済宗僧侶；神社家の出身）、宋に渡る。
・１１７３年：親鸞、日野有範の子として誕生。鎌倉期に活躍した僧侶の身分的出自を述べれば、親鸞の師・法然は武家の出、親鸞と道元は貴族。日蓮は現在の千葉県・小湊の漁師の子であり平民の出身で、自らを「片海の海人の子」、「海辺の旋陀羅が子」を名乗った。旋陀羅（センダラ）はサンスクリット語・チャンダーラの漢字音写で、ヒンズー教のカースト社会ではアウトカースト、つまりカースト外の最下級である。もちろん日本列島には広義のアーリアン文明圏におけるような血統重視のカースト制度はないから、日蓮が「旋陀羅が子」と名乗るのは、ゴータマ・ブッダが唱えた人間の平等観にもとづく彼なりの社会的差別批判である。
　親鸞は下級貴族の出身とはいえ仏教者として、出自や社会的職業的差別を超えた人間の平等観を唱えていたことは当然である。「海・河に網をひき、釣りをして、世をわたるものも、野山にししをかり、鳥をとりて、いのちをつぐともがらも、商（あきな）ひをし、田畠（でんばく）をつくりて過ぐるひとも、ただおなじことなり」（『歎異抄』）。

この年、明恵（華厳宗僧侶：武家出身・平重国の子）誕生。彼は後に法然の徹底的批判者となる。

・１１８０年：後鳥羽天皇（日本歌道における美意識を代表する「新古今和歌集」の編纂者）、誕生。

・１１８１年（親鸞 9歳）：天台座主を４回勤めた慈円（九条家の祖・九条兼実の弟）の下で出家得度し天台僧となり範宴と号する。その後、親鸞は9歳から29歳まで20年間、比叡山で修行。

　この年から翌年にかけて飢饉、大風、洪水、疫病などが起こる。多くの人々が餓死し、死臭が世界に満ちて、路傍に生き絶えた母親の乳房を赤子がくわえているような光景を『方丈記』は簡潔に記録する。

・１１８５年（親鸞 13歳）：元暦の大地震。これも『方丈記』に記すところ。「また同じころとかよ、おびたたしく大地震（おおなゐ）ふること侍りき。そのさま世の常ならず、山は崩れて河を埋（うづ）み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水湧き出で、巌（いわほ）割れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬はあしの立ち処（ど）を惑はす。都のほとりには、在々所々堂舎塔廟ひとつとして全（また）からず、或は崩れ或は倒れぬ。塵灰たちのぼりて、盛（さか）りなる煙のごとし。・・・」

　この年３月24日、源義経、平氏軍を壇ノ浦の海上に破り、平氏一族の多くが戦死。

・１１８７年：栄西、再度、入宋。

・１１９０年：西行（武家。僧侶、歌人）寂。「願わくは花のもとにて春死なむその如月の望月の頃」

・１１９２年：源頼朝、征夷大将軍、鎌倉幕府を開く。

・１２００年：道元、誕生。

・１２０１年：親鸞（29歳）比叡山を下り、京都の六角堂に100日間籠り95日目に聖徳太子の示現をえたが、「生死（しょうじ）出（い）づべき道」を求めてさらに100日間、六角堂に通いつめる。京都で念仏の教えを説いていた法然に出会い35歳まで師のもとで研鑽。しかし、比叡山を降りて念仏一道を説いていた法然へ比叡山の一部の僧たちによる弾圧は増してゆき、奈良仏教界も法然の活動に神経をとがらせて、興福寺の学僧らは時の朝廷に念仏の停止を訴えた。

「洛都の儒林（朝廷の儒学者；司法官僚に相当）」は、「邪正の道路を弁（わきま）ふること」なく、正邪の判断が錯乱していた。かくて「主上臣下 (1)、法に背（そむ）き義に違し、忿（いか）りを成し怨みを結ぶ」（親鸞『教行信証』）。しかし、天皇は外国の皇帝のような絶対的政治権力を握っていたわけではないし、親鸞は「和国の教主」聖徳太子の志の真意を深く理解していたから、権力の上位理念としての天皇の権威と皇室の伝統的文化価値については肯定的立場である。

・１２０５年（親鸞 33歳)：奈良仏教の権威・興福寺の衆徒が法然の提唱する専修念仏の禁止を求めて興福寺奏状を朝廷に提出。

・１２０７年：親鸞 35歳、師の法然と他4名の念仏者らと共に僧籍を剥奪され、流罪を宣告される。法然は四国の讃岐へ、親鸞は越後へ流刑。さらに他4名は斬首。

・１２００年：道元（日本曹洞宗開祖）誕生。

・１２１１年：親鸞（39歳）は流罪を解かれて関東へゆく。諸説あるが、親鸞は越後に配流中に妻帯したようだ。妻の名を恵信といい、彼女の私信（1921年、西本願寺の蔵で発見）が残されていて、親鸞の生き様を知る貴重な資料となっている。

・１２１２年（親鸞40歳）：法然、80歳にて往生。

・１２１６年：鴨長明（1155頃–1216）没。

・１２２１年（親鸞49歳）。後鳥羽天皇は鎌倉幕府に対して「承久の乱」を起こして破れ、隠岐に配流。北畠親房は「神皇正統記」で後鳥羽院を厳しく批判。

・１２２２年：日蓮、誕生。

・１２２３年：道元、宋に渡る。

・１２２４年（親鸞５２歳）：延暦寺の僧たちは再び念仏者の活動停止を訴える。

・１２２７年（親鸞５５歳）：延暦寺の一部の僧たちは、京都大谷にある法然の墳墓を破却。さらに法然の門下の３名が流刑、法然の主著『選択本願念仏集』の版木が焼却される。道元、宋より帰国。

・１２３１年：親鸞、５９歳、病臥。

・１２３２年頃：親鸞一家は、京都へ帰る。華厳宗中興の祖・明恵、示寂。

・１２３９年：後鳥羽天皇、配流された隠岐で崩御。

・１２５３年（親鸞８１歳）：道元、５３歳、京都で示寂。

・１２５４年（親鸞８２歳）：妻・恵信は、この年以前のある時期に越後へ帰郷。
・１２５５年、親鸞８３歳：住居の火災に遭い、弟の尋有（じんう）の屋敷に移る。
・１２５６年、親鸞８４歳：息子の善鸞を義絶。「いまは父子の義はあるべからず候。… 今は親といふことあるべからず。子とおもふことおもひきりたり。… かなしきことなり。」と親鸞は手紙に記す。
・１２５９年（親鸞８７歳）：全国的深刻な飢饉。国々に夜盗・強盗が蜂起。
・１２６０年（親鸞８８歳）：日蓮「立正安国論」を北条時頼に進呈し、念仏宗（浄土宗）や禅宗を災厄の根源であると批判。
・１２６３年1月１６日：親鸞、９０歳、往生。

激しい歴史的状況と個人生活を体験しつつ９０年の緊張した人生を親鸞は生き抜いた。

＊＊＊

親鸞９０年の生涯の仏教活動に関わる歴史的状況の総括

1. 聖徳太子が確立した和国・日本の下に鑑真が築いた日本仏教の基盤である奈良仏教において政治化に汚染された一部の衆徒の乱行。国家公務員の官僚と官僚化した宗教体制は常に退化する可能性を帯びている。
2. 司法官僚の進言にしたがって突き動かされた、美意識の価値観に生きる後鳥羽上皇の積極的政治介入と失墜。政権の直接最高責任者（上皇・大統領・首相・独裁者など）が断罪され、彼らを支える官僚組織に守られた上級官僚は生き残る。
3. 宗教と政治と行政の関係には常に密接な干渉がある。
4. 奈良仏教界に生まれてきた負の性格の批判として最澄が命を賭けて築き上げた日本仏教の総合的修行道場としての比叡山の日本天台宗だが、やがて天台宗自身に道義の退廃が発生。革新的運動が成功して体制化すると、その内部で退化が始まる。
5. 比叡山で修行した鎌倉仏教の数々の個性的仏教者たちの活動。彼らが明治維新までの伝統的日本人の宗教情念の形成に重大な影響力を持った。

しかし、日本の鎌倉期の宗教状況は、中国における皇帝の絶対的政治権力とそこに従属する宗教的活動状況とは基本的に異なる。また西欧においてキリスト教会が政治権力の上位にあって欧州の国王の結婚問題にも介入し、一般の人々に異端審問と魔女裁判などを行ったような状況とも違う歴史的状況であった。
　古代において聖徳太子が日本を、仏教自体ではなく “宗教 としての仏教”を超える “和国” を確立したからこそ、信教と布教の基本的自由があって鎌倉仏教は成立した。

冒頭に掲げた「この世の本寺本山のいみじき僧とまうすも法師とまうすも　うきことなり」は晩年に書かれた親鸞の和讃「愚禿悲歎述懐」の一部であるが、「いみじき僧」は「官位において高位の僧」のこと、「うきこと」は「なげかわしいこと」である。

これは古代から現代にまで通底している、いわゆる宗教教団組織と密接な関係にある特殊な知識人としての聖職者一般に対する親鸞の鋭い批判であるといってよい。

親鸞は犯罪者とされ僧籍を剥奪されたから非僧となったが、仏教者の本来を放棄したわけではない。そこで非僧非俗の立場を貫いた。

因みに日蓮は、「四箇格言（念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊）」を主張し法然の専修念仏のみならず禅宗、真言宗、律宗なども批判した。

＊＊＊

西欧近代知識人における「人」と「思想」の乖離を、それとなく指摘したのは鈴木大拙であったと理解しているが、堕落した聖職者らを批判する親鸞が同様に鋭く批判したのが自分自身であった。

「浄土真宗に帰すれども真実の心はありがたし　虚仮不実のわが身にて清浄の心もさらになし」

「是非しらず邪正もわかぬこのみなり　小慈小悲もなけれども名利に人師をこのむなり」（親鸞、85歳以降作）

様々な文脈から名声・利欲（量的拡大を限りなく求める人間の所有欲）を超えて親鸞が最も鋭く批判するのは、知識人における内省の欠如に基づく観念の弄びに基づく支配者（人師）思考である。

親鸞の主著『教行信証』は漢文で記述されているが、親鸞は晩年には多くの和讃を著し、和語と漢語を併用して、知識人らの賢しらに深い批判を加える。

「よしあしの文字をもしらぬひとはみな　まことのこころなりけるを　善悪の字しりがほは　おほそらごとのかたちなり 」（親鸞、85歳以降の和讃）

「よしあしの文字をもしらぬひと」の「まこと」に違反しているのは、「善悪の字しりがほ」の宗教家を含む知識人たちであり、司法を歪めて責任は政治家と行政の当局者に負わせ、実業に従事する多数の無辜の人々の命運を狂わせて恬として恥じない人々である。

これは古代から現代にまで連綿として流れている知識人に纏わりついている強固なる「知の賢しら」ではないか。「知の賢しら」は、聖書的には、知恵のリンゴをかじった人間に喩えられ、ソロモンの栄華に酔う者たちに喩えられるだろう。そのような人間の実態を仏教では無明煩悩に翻弄された「罪悪深重の凡夫」という。

『教行信証』の最終巻には、末法史観にもとづき、大乗経典『大方等大集経』を引用して、時代の悪の集合的心象風景が生々しく象徴的に表現されている。

今は「闘諍悪世の時・・・大煩悩の味はひ世に遍満せん。集会の悪党、手に髑髏を執り、血をその掌（たなごころ）に塗らん、ともにあひ殺害せん。」

親鸞の在世中、貞慶（法相宗）は法然の念仏道の活動の停止を求めて「興福寺奏上」を起草して朝廷に提出し、明恵（華厳宗）は「摧邪輪（ざいじゃりん）」を著して法然の行う念仏道を徹底批判した。

明恵は持戒堅固で知られた華厳宗の学僧であり、仏道を極める決死の覚悟を自らに課して、仏前に向かって右耳の外耳を剃刀で自ら切り落とした。また１９歳ごろから没年の５８歳まで見た夢とそれに対する解釈を記した『夢記 (ゆめのき)』が有名であるが、それは自己の煩悩との熾烈な情念の戦いでもあったろう。

一方、法然は「知恵の法然房」と知られた当時の偉大な学僧で天性の聖者でありながら、しかも自らの愚を深く自覚し、知の賢しらに生きる知識人に対する徹底的批判者であった。

中国の天台宗に学び日本に理想的修行道場を設けて和国の人づくりのために比叡山延暦寺を建てた帰化人の流れを汲む最澄は、当時最高の知識人の一人であったはずだが、１９歳の時、自らを「…愚が中の極愚、狂が中の極狂、塵禿の有情、底下の最澄、上は諸仏に違し、中は皇法に背き、下は孝礼を闕けり…」（「伝教大師発願文」）と自覚した。

最澄以後の「和国」の伝統を守る僧侶や知識人は、最澄の「愚の自覚」に多大の影響を受けて、そして鎌倉仏教の優れた人物が現れてきた。

伝統的日本の指導者たちと日本文学と大衆の性格形成に大きな影響力を持った仏教者と歌人たち：法然（浄土宗）、日蓮（日蓮宗）、道元（曹洞宗）、一遍（時宗）、明恵（華厳宗）、そして鴨長明（歌人・「方丈記」の著者）、西行（「新古今和歌集」で重要な存在感を占める歌人の僧）、中国僧・無学祖元（１２７９年来日、時宗の精神的指南役で鎌倉円覚寺開山）らは、みな親鸞と同時代人であった。

１２６３年1月１６日、京都の仮住まいで、末娘の覚信、次弟の尋有、数少ない直弟たちに見守られ、わずかな所持品の筆硯を残して親鸞は９０年の生涯を終えた。

【NPJ通信・連載記事：一水四見】村野謙吉

親鸞とジョージ・オーウェル（2/2）

「すべての動物は平等である。しかし一部の動物は他のも動物よりさらに平等である」 (オーウェル『動物農園』)
「戦争は平和・自由は隷従・無知は力である」 (オーウェル『１９８４年』)

２０２２年９月８日、９６歳でエリザベス二世女王が死去した。あたかもかっての大英帝国が既視感をもって有終の美を飾るがごとくにロンドンで女王の国葬が盛大に行われた。

エリザベス二世は１９２６年に誕生したが、その年２３歳のエリック・ブレア（ジョージ・オーウェルの本名）は、英領インド帝国警察官としてビルマ（現在のミャンマー）に勤務していた。

親鸞と同様にオーウェルについても彼の生涯を時代背景や他の重要な関係者らの行動も交えながら、彼の特異な生涯の略年譜を以下に記す。

・１９０３年、エリック・アーサー・ブレアは英領インド、ベンガルで誕生。父親は英領インド帝国政府で阿片局の官吏。「アヘン戦争は、単にイギリスによるアヘン貿易強行のための中国侵略戦争以上の意味を持っている。この “西からの衝撃” によって、我々の住む東アジアの近代史の幕が切って落とされたのである」（陳舜臣『実録アヘン戦争』）。『真昼の暗黒』の著者 A.ケストラーも驚くほどの仮借ない批評精神を持ったオーウェルであるが、彼がアヘンのことに触れた文献を寡聞にして知らない。アングロサクソンの植民地政策の徹底的批判者であったオーウェルであるが、父親の勤務内容については触れたくない、触れられて欲しくない事実だったのかもしれない。
・１９０４年（オーウェル１歳）：母はエリックと姉を連れてイギリスに帰国。
・１９１２年（９歳）：英領インド帝国の勤務を定年まで勤めた父がイギリスに帰国。
・１９１４年（１１歳）：第一次世界大戦勃発。
・１９１７年（１４歳）：パブリック・スクール・ウェリントン校に奨学生として入学するも１学期で退学、イートン校に奨学生として入学。将来のエリートとなる裕福な学生が入学するイートン校で “奨学生” は不名誉な地位にあったようだ。オーウェルがイギリスの階級 (Class)に目覚め始めた時期であったろう。
・１９２１年（１８歳）：イートン校卒業。
・１９２２年（２０歳）：インド帝国警察官任用試験を受験後、英領インド帝国警察官としてビルマに赴任。
・１９２７年（２４歳）：休暇を得て、ラングーン、マルセイユ、パリを経由して帰国。辞職を決意して作家修行の準備を開始。
・１９２８（２５歳）：春に自主的浮浪者体験をし、その後、１０２９年末まで、パリの安ホテルに滞在。
・１９２９年（２６歳）：クリスマス以前にパリから帰国。ニューヨークから世界大恐慌始まる。ソ連でスターリンの独裁体制すすむ。
・１９３０年（２７歳）：ロンドンで貧民や失業者たちと暮らす放浪生活。『パリ・ロンドン放浪記』執筆開始。
・１９３３年（３０歳）：１月、ヒトラーがドイツ首相となる。
・１９３５年（３２歳）：アイリーン・オショーネシーと初会。
・１９３６年（３３歳）：イングランド北部の炭鉱労働者や失業者の実地調査。セント・メアリー教会でアイリーン・オショーネシーと挙式。７月１８日、スペイン内戦勃発。１２月２６日、内戦下のスペイン、バルセロナに入る。
・１９３７年（３４歳）：１月～６月、共和国政府側のPOUM（マルクス主義統一労働者党）の民兵隊に参加、アラゴンで戦う。５月２０日、ファシスト兵の狙撃によって頸部に貫通銃創を受ける。妻アイリーンとスペインを脱出。
・１９３８年（３５歳）：３月、片肺に結核性病変が見つかりサナトリウムに入所。９月、療養のため妻とモロッコ、マラケシュ近郊に滞在。

1937年3月13日、POUMアラゴン戦線分遣隊に参加した英国↑独立労働党ILP派遣団のオーウェル（中央の長身の男）と妻アイリーン (3)

・１９３９年（３６歳）：３月、モロッコから帰国。９月１日、ドイツ軍、ポーランドに侵攻。９月３日、英仏はドイツに宣戦布告。二次世界大戦開始。
・１９４０年（３７歳）：５月１０日チャーチルを首班とする挙国一致内閣成立。７月、ドイツ空軍によるロンドン空襲開始。
・１９４１年（３８歳）：オーウェルはBBC東洋部インド課にトーク・アシスタントとして入局。
・１９４３年（４０歳）：BBCを退職。
・１９４４年（４１歳）：２月、『動物農園』脱稿。６月、オーウェル夫妻は新 生児の男子を養子にする。６月２８日、オーウェル夫妻の住むフラットがドイツ軍の爆撃で破壊。
・１９４５年（４２歳）：２月、ヤルタ会談。３月、妻アイリーン急死。４月３０日、ヒトラー自殺。８月に米軍は広島と長崎に原爆投下。８月１４日、日本はポツダム宣言受諾。第二次世界大戦終結。
・１９４７年（４４歳）：１２月、結核のためグラスゴーの病院に長期入院。
・１９４８年（４５歳）：１２月、『１９８４』の入稿用原稿のタイプ打ち作業完了。
・１９４９年（４６歳）：６月『１９８４年』刊行。９月、入院先のロンドン、ユニヴァーシティ・コレッジ付属病院内でソニア・ブラウネルと結婚。
・１９５０年（４６歳）：オーウェルは１月２１日、大量喀血して死亡。

＊＊＊

歴史的かつ文明的な背景のまったく異なる状況の下に生きた日本の仏教者・親鸞とイギリス作家・オーウェルを並べて、そこに私を惹きつける共通要素を見つけるという個人的な試みをしているが、それは一体なんだろうか。

◯ 親鸞の「凡夫の自覚」(2) とオーウェルの「ありのままの人としての品位（human decency）」
親鸞の師・法然と親鸞自身が修行した比叡山延暦寺の開基・最澄は１９歳の時、自らの倫理的存在を深く内省していた。自分は「愚が中の極愚、狂が中の極狂、塵禿の有情」(「伝教大師発願文」) である、と。

当代一級の知識人の一人であった最澄が見つめた人間性の愚と狂の自覚は、その後の比叡山の修行僧に受け継がれていった。法然は「愚痴の法然」を自覚し、親鸞は「愚禿」を名乗り、禅僧一休は「狂雲子」、高杉晋作は「東洋一狂生」、山縣有朋は「狂介」を名乗り、「狂」の精神は芸術家肌または革命家肌の人士に明治維新まで受け継がれていったようである。

しかし最澄と法然は、天性の聖者の性格を与えられていた者の「まことの愚」の自覚であるが、親鸞の自覚は「まこと」亡き凡夫（ただの人）としての愚の自覚である。

このような愚の精神は、洋の東西を問わず一定の国家体制内における高学歴の者たちが依存する人間的価値観としての名声、経済力、政治力、学歴、そして自身に対する内省を欠いて観念論をもて遊ぶ知識人らに対する普遍的批判精神ではなかろうか。
親鸞の子息には諸説あるが4男3女をもうけたと言われ、非僧非俗を名乗る異様な仏教者であったが９０歳の長寿に恵まれた。しかし親鸞は常に仏教を説いていたわけではなかった。愛する者と別れて悲嘆にくれる男には「酒はこれ忘憂の名あり。これをすすめて笑うほどになぐさめて去るべし（『口伝鈔』）」と語っていた。

一方、オーウェルは月並みの人生を送ることは叶わなかったが、心底、妻と子供いる平凡な家族生活に愛着していたようだ。

彼は自身の子供に恵まれなかったので41歳の時、男子の新生児を養子とし、42歳で妻に先だたれ、46歳で結核の末期の死の病床で次の妻と結婚し、その歳に死去した。

しかしオーエルが愛したと思われる人間観を指摘すれば「ありのままの人としての品位」（human decency）ということではないだろうか。

これは理想的な人間像でもなければ、常に肯定すべき人間の品格でもなく、倫理学者が定義づける理想的観念でもなく、ただ「ありのままの人としての価値」である、と言う他はない。いわば「ただの人・凡夫」である。

くたびれたスーツを着てネクタイをして、養子の小さな息子を乳母車に乗せて、父として親としての幸せをかみしめているイギリス人オーウェルの写真を見るたびに切ない想いにかられてしまう。

散歩するオーウェル (4) ↑

◯ 不正 (a sense of injustice) (2) についての徹底した批判精神
オーウェルは平凡な家庭生活を愛した人であったが、一方、略年譜で示されるように、彼はそれをまったく否定するようなの人生を送った。

平凡な庶民の生活を犠牲にし、責任を回避している、政治体制（政府）に依存したエリート知識人らに支えられた不正が浸透した世界構造に対する一貫した根本的批判が『１９８４年』の世界ではないのか。

そして、親鸞にもオーウェルにも思想家に嫁いだ妻があり、それぞれの夫婦は志を共にして激動の時代を生き抜いた。

＊＊＊

読み込むたびに深まってゆくような、読み手の歴史認識と西欧文明に対する政治認識が試されるような『１９８４年』の含意を、出版直後に解説したオーウェル自身の言葉を以下、要約して引用する。

「『１９８４年』の世界は、中央集権化された経済体制 (a centralized economy) が免れ難い、表面上の共産主義とファシズムの形で部分的に実現されている様々な倒錯の暴露である。全体主義の様々な思考は、あらゆるところで知識人の心理に根付いていると、わたし（オーウェル）は考えている。・・・
　本書の舞台はイギリスに置かれているが、それは英語を話す様々な人種が本質的に他の者たちより優れているのではなく、全体主義 (totalitarianism) は、もしそれに対して戦わなければ、いかなるところでも勝利するかもしれないだろうと言うことを強調するためだ。」（New York Times Book Review, 31 July 1949) (5)

米ソ冷戦は欧州内の２大軍事勢力における旧来の戦時対立であったが、『１９８４年』の全体主義世界では、世界の３大軍事グループの二つが常時戦闘するように維持されている。
　特別な時期に起こる戦時経済ではなく、常時、金融支配が中核となって戦争や情報組織を維持管理しているのが『１９８４年』の世界だ。

親鸞は自身について、「悪性（あくしょう）さらにやめがたし　こころは蛇蝎（じゃかつ）のごとくなり　修善も雑毒（ぞうどく）なるゆゑに　虚仮（こけ）の行（ぎょう）とぞなづけたる」（「愚禿悲歎述懐」）と自省して宗教家の外面的善意の奥の偽善性を指摘する。

一方オーウェルはアングロサクソンによる植民地支配の官僚組織の恥部に父子ともに関わって、彼自身はその偽善性を深く洞察し、歴史的自省を行なっている。

そして親鸞もオーウェルも、現世的価値観であるに過ぎない出自にもとづく階級と宗教組織に内在する差別と特権に反対し、表現の自由を擁護する普遍的思考を持っていた。

最後に親鸞とオーウェルの共通点をあげれば、親鸞は聖徳太子を和国の教主と尊崇し和国日本をこよなく尊重したが、オーウェルはアングロサクソンによる植民地主義など様々な歴史上の瑕疵を鋭く批判しつつも、こよなくイングランドを愛する郷土愛の人だった。

＊＊＊

２０１７年、私は、後鳥羽上皇が配流された隠岐を訪ねて往時を偲んだ。
親鸞の生きた鎌倉時代を偲びながら、海の彼方の朝鮮半島からの風を感じる気がした。

２０２２年、歴史の大きな転換期を象徴するような様々な出来事があった。
・２月24日、ロシアのウクライナ侵攻。この動乱は現在も進行中である。
・７月８日、安倍元首相、銃撃による殺害（67歳）。この事件の真相はいまだに不明である。
・８月３０日、ミハイル・ゴルバチョフ（元ソビエト連邦大統領）死去。91歳。
・９月８日、エリザベス二世女王が死去（96歳）。
・11月30日、江沢民（元中国共産党の総書記、元国家主席）死去（96歳）。

一つの旧文明史が終わり、予測しがたい新たな『すばらしい新世界 (Brave New World)』(オルダス・ハクスリー;1932) が本格的に始まろうとしているかのようだ。

金融主導の支配情念に絡め取られた政治・軍事・宗教・教育などの組織にいる高等教育を受けた愚の自覚が欠如した、庶民の平凡な家庭生活の幸福に配慮の無いエリート集団が、世界の大再編 (Great Reset) を意図し実行していることをオーウェルは的確に直感していたのであろうか。

親鸞『教行信証』化身土巻の末法史観は、オーウェルの『１９８４年』の世界に連なっているのだろうか。
「新言語 (Newspeak) 」の進化した形態がAI言語なのだろうか。

『１９８４年』において、現在の旧言語 (Oldspeak) による言説世界が、やがて新言語 (Newspeak) の言説世界にとって代わられるのは２０５０年と予想されている。
その時 Big Brother がAI言語をも統御しているのだろうか。

２０５０年に向かって小説『１９８４年』の世界は、現実の歴史を包み込むようにして現在も暗示的に進行中である。

（2026-01-07)

---

* 本コラムは、【NPJ通信・連載記事】「親鸞とジョージ・オーウェル：知識人に突きつけた仮借なき批判精神」(1/2: 2022.10.01))と(2/2: 2022.10.08）の改訂版。

(1) 「主上臣下」：『眞宗聖教全書 二　宗祖部』（昭和15年(1940)・興教書院発行・定価五圓）には「主上」の2字は欠字となっている。「凡夫」は中国の古典語としては「庶民・並みの人」の意味であるが、仏教語としてはサンスクリット語の pṛthag-jana の訳語で、聖者とは異なった愚かな生き物の意である。「十七条憲法」で「凡夫」は「タダ・ヒト」と和訓される。

(2) Why I Write (1946): The Spanish war and other events in 1936-7 turned the scale and thereafter I knew where I stood. Every line of serious work that I have written since 1936 has been written, directly or indirectly, against totalitarianism and for democratic Socialism…. What I have most wanted to do throughout the past ten years is to make political writing into an art. My starting point is always a feeling of partisanship, a sense of injustice.

(3) WIKIMEDIA COMMONS: File: George Orwell and Eileen O’Shaughnessy with members of the ILP unit

on the Aragon Front outside Huesca, 13th March 1937.jpg
(4) www.pinterest.com /Orwell on a walk
(5) BERNARD CRICK: *GEORGE ORELL Nineteen Eighty-Four With a Critical Introduction and Annotations*; 1984.

（参考文献）

川端康雄『ジョージ・オーウェル　---「人間らしさ」への讃歌』2020.

後藤春美『アヘンとイギリス帝国』2005.

Sonia Orwell and Ian Angus, ed. : *THE COLLECTED ESSAYS, JOURNALISM AND LETTERS OF George Orwell: Volumes I - IV*; 1968.
BERNARD CRICK: *GEORGE ORELL Nineteen Eighty-Four With a Critical Introduction and Annotations*; 1984.

＃本文、引用文、一定の内容などについて、筆者の意図しない誤記や誤解などがあれば、ご指摘を受けて、感謝をもって訂正したい。

村野謙吉（本名・村石恵照）:（専門）仏教学;（研究領域）日本文化 / ジョージ・オーウェル：（職歴）コラムニスト（*Mainichi Daily News:* 連載 Kiku & Sakura [日本文化論全100篇]：1978 -1983) ;『*Young East* 』 (1925-1944; 1975年復刊号編集主任（現在休刊；ヤング・イースト協会: 会長 中村元）。元武蔵野大学教授。
（主要論文）「仏教の霊魂観ー縁起・輪廻の主体・往生の主体をめぐって」(日本佛教學会年報)
（訳書・共著）『プリンティングデザインアンドレイアウト: 欧文書体とレイアウトの常識』;『地球の歩き方=旅の会話集15 (ハンガリー・チェコ・ポーランド語/英語』(ダイヤモンド・ビッグ社)；『オーウェルー20世紀を超えて』(音羽書房鶴見書店);『仏教最前線の課題（「いのちをめぐる仏教的知のパラダイム試論）』(武蔵野大学出版会)；『一帯一路からユーラシア新世紀の道（「21世紀新シルクロードへの旅立ちーパクスローマーナとパクスシニカの対峙を超えて」)』(日本評論社)。
（外国口頭発表）
・A Universal Idea of the Belt and Road Initiative Beyond the Civilizational Conflicts between Pax Romana and Pax Sinica (「アジア文明対話大会」北京・2019).
・The Statehood and Buddhism in Japan; The Founding of Japan as the Land of *Wa* (Freedom-Peace-Harmony) by Crown Prince Shotoku; presented in Istanbul, Turkey (トルコ共和国建国100周年記念ワークショップ ＜アジアにおける国家経験の蓄積＞イスタンブール; 2023).